

委員による二次評価まとめ（平成28年度事業の評価）

I 美術を通じた交流を促進する		【集客・交流推進】		
① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。		〔広報〕		
達成目標	・年間観覧者数 100,000人以上	(27年度)	1次評価	2次評価
		S	A	
小林委員長	A			
菊池委員	A			
柏木委員	A	女性を描く展については、結果分析をして、向後の目標設定の参考とすべきかと思う。		
樺澤委員	S	年間観覧者数は前年度より減少しているが、過去10年間の数的推移をみればH.21およびH.24を除けば、達成目標を超えて継続的に維持されており、「S」評価が許容され则认为る。		
河原委員	A			
木下委員	A			
草川委員	A	展覧会内容によっては、当然観覧者数は大幅な差異があり、今年度は30,000人を超える目玉内容がなかった。		
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な広報媒体の特性を生かして、効果的な広報活動を実施し、交流を促進する。 ・各種イベントを開催し、展覧会以外の要因での利用を増やす。 ・外部連携を推進し、様々な機会と場所を捉えて、美術館の情報を発信する。 ・旅行会社などへの働きかけを通じて、団体集客を促進する。 ・商業撮影の受入と誘致を推進し、美術館のイメージアップを図る。 	(27年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
菊池委員	A			
柏木委員	A	女性を描く展は、著しく目標入館者数を下回っているが、来館者の満足度は高いようだ。広報戦略に課題があったのだろうか？		
樺澤委員	A			
河原委員	A	開館10周年となり、認知度も高くなってきているが、より親しまれる美術館となるよう新たな情報発信など工夫を続けていただければと思う。		
木下委員	A			
草川委員	A	様々な広報媒体や情報発信を有効に活用しており、その1つであるツイッターのフォロワーが前年の倍ぐらい伸びたのは評価できる。		

②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。

[市民協働]

達成目標			
	(27年度)	1次評価	2次評価
・市民ボランティア協働事業への参加者数延べ2,000人 (事業ごとに加算。登録者・一般参加者を総合して)	A	A	
小林委員長	S	入場者の数ではなく、市民ボランティアの協働事業参加への延べ参加数が414人増加していることや、新たに登録を希望したボランティアがいたこと等を評価した。	
菊池委員	S	評価値を大きく上回り、ボランティアに対する市民の知名度とモチベーションが高まっている表れと思う。	
柏木委員	A		
樺澤委員	A		
河原委員	A		
木下委員	A		
草川委員	A	延べ参加者数が、対前20%近く伸びているのは評価できる。(色々な施策を工夫・実施している)	
実施目標			
	(27年度)	1次評価	2次評価
・市民が美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。 ・市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。	A	A	
小林委員長	S	延べ人数の増加や、新規登録者がいたことなどを評価し、実施目標である市民ボランティアへの場所の提供ややりがいの場が年間を通して提供されていたと判断した。	
菊池委員	A	ボランティア数が増加した分オペレーションに気を配ることにより、より効果的な運営ができると思う。	
柏木委員	S	ボランティア活動の評価の要点は、参加者数よりも、個々のボランティアがモチベーションを持って取り組んでいけるような工夫がなされているか否かにあると思うので、その意味では、Sでよいと思う。	
樺澤委員	A		
河原委員	A	小学校鑑賞会ボランティアの方がクラスごとについてくださり、初めて美術館を訪れる児童も安心して鑑賞し学び楽しむことができた。次年度もサポート体制をご検討いただけるとのこと感謝している。	
木下委員	A		
草川委員	A		

II 美術に対する理解と親しみを深める

【社会教育】

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。

〔展覧会・教育普及〕

達成目標	・企画展の満足度 80%以上	(27年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
菊池委員	S	年々企画展の満足度が向上しており、安定感もある。		
柏木委員	S	来館者総数の1%強の母数に基づく数値結果ではあるが、出品作品に対する満足度もすべて高い数値を示しており、「利用者の知的欲求」は高水準で満たされていると評価する。		
樺澤委員	A			
河原委員	A			
木下委員	A			
草川委員	A	キャプション文字の見にくさや解説などに問題があり、改善の余地があると判断され改善が可能ならば、早急を実施すれば満足度は大幅にアップすると思う。その際には、今後目標設定を上げるべきと考える。		
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6回(児童生徒造形作品展を含む)の企画展を開催する。 ・所蔵品展・谷内六郎展をそれぞれ年間4回、テーマをもたせた特集を組みながら開催する。 ・知的好奇心を満たし、美術への理解を深める教育普及事業を企画・実施する。 ・美術への興味や関心が深まる美術関連の資料(図書、カタログ等)を、図書室で収集・整理・保管・公開する。 ・資料が探しやすく、快適に利用できる図書室環境を維持する。 ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。 	(27年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
菊池委員	S	満足度に表れているように、平均したばらつきのない評価は、企画内容が支持されたものと思う。		
柏木委員	S	展覧会の内容もバランスが取れており、関連事業にもしっかり取り組んでいると思う。数値目標未達の展覧会については、原因の分析が必要。		
樺澤委員	A			
河原委員	A	大人・子ども・親子など様々な層が楽しめる企画展であり、作家本人の講演会やトークは鑑賞の魅力を増す効果があり、来館者の満足につながったと思う。		
木下委員	A			
草川委員	A			

④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。

[若年層への教育普及]

達成目標	・中学生以下の年間観覧者数22,000人	(27年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
菊池委員	A			
柏木委員	A	この三カ年で幼児の観覧者数が微減している理由は何だろうか？		
樺澤委員	A			
河原委員	A			
木下委員	A			
草川委員	A	年々減少する子供の人口はどうすることも出来ない。家族層の集客を更に強化すべきと思う。		

実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。 ・学校および関係機関と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。 ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。 ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。 ・小学生美術鑑賞会を充実させるため学校との連携を強化する。鑑賞会と連動した教材「アートカード」の一層の活用促進を教員と協力しながら行う。 	(27年度)	1次評価	2次評価
				S
小林委員長	A			
菊池委員	S	<ul style="list-style-type: none"> ・学校との連携においては、当美術館の学芸員含めスタッフが親身になって美術を広める努力をしていると思う。 ・アートカードの地道な活用が、学校現場における美術教育を後押ししていると思う。 		
柏木委員	S	造形活動支援も鑑賞教育もメニューが豊富で、PDCAによる自己分析のしっかりできているように思う。		
樺澤委員	A			
河原委員	A	児童生徒造形作品展を美術館で開催していただくことにより、児童が美術館を訪れるきっかけとなり、「他の作品も見たい」「また来館したい」という思いにつながった声が聞かれた。		
木下委員	A			
草川委員	A			

⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。

[収集管理]

達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・環境調査の実施(年2回) ・美術品評価委員会の開催(年1回) 	(27年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
菊池委員	A			
柏木委員	A	所蔵作品管理、作品収集に関する美術館としての取組みは過不足ないと思われる。		
樺澤委員	A			
河原委員	A			
木下委員	A			
草川委員	A			
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。 ・適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。 ・計画的に所蔵作品の修復、額装を行う。 ・所蔵作品が広く価値を認められ、他の美術館等で開催する企画展などに活用されている。 	(27年度)	1次評価	2次評価
		C	C	
小林委員長	C	実施目標でC評価をつけざるを得ない理由は作品購入が出来ない点にある。しかし、美術品の充実と管理問題が、達成目標と実施目標の設定項目で有機的連関をみているかどうかは、再検討の余地がある。達成目標では所蔵作品の充実という視点が欠落しているように読み取れる。		
菊池委員	C			
柏木委員	C	<ul style="list-style-type: none"> ・作品購入費の財源確保については、まずは、美術館の設置者で所蔵品の所有者である横須賀市の政策判断になると思うので、2次評価はFとすべき側面もあると考える。 ・美術品の購入が途絶えると、優れた美術品の情報が集まらなくなり、将来的な美術館活動に影響する懸念が強くある。受贈にあたっては作品を厳選する必要がある。 ・これらを総合的に評価してCとした。 		
樺澤委員	B	「C」の評価基準の内、「目標にはほど遠い」という結果への客観評価であれば「C」であるが、作品購入が不可の現状を補完する努力がなされており、「より一層の努力を要する」という評価基準は該当しないと考える。		
河原委員	C	魅力的な美術館となるためには、どのような作品が収蔵されているかも重要なカギになると考え、引き続き作品購入の予算が配当されるよう願う。		
木下委員	C			
草川委員	C	<ul style="list-style-type: none"> ・作品購入費の予算配当は、美術館の努力では結びつかない部分もあると思う。 ・更なる予算配当の要望努力を期待する。 		

Ⅲ訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する

【運営・管理】

⑥利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。

[メンテナンス・来館者サービス]

達成目標	・館内アメニティ満足度 90%以上 ・スタッフ対応の満足度 80%以上	(27年度)	1次評価	2次評価
		S	A	
小林委員長	A			
菊池委員	S			
柏木委員	S	いずれも数値的に高水準にあると評価する。		
樺澤委員	S	建築物および付帯設備は放置すれば経年劣化が進行する。従って、その維持管理への配慮と負荷は増大する。”心地よい空間の提供”は誘客に対する基本であり、日常の配慮と工夫が能動的、継続的になされていると考える。		
河原委員	A			
木下委員	A			
草川委員	A	スタッフ対応が前年より低下したという問題は大きいと思う。年々向上していかなければならないことであり、何が問題だったのか？		
実施目標	・建築のイメージを損なわないよう、じゅうぶんなメンテナンス、館内清掃を行う。 ・受託事業者と協力して、ホスピタリティのある来館者サービスを実践する。 ・受託事業者と協力して、付帯施設(レストランおよびミュージアムショップ)を来館者ニーズに応じて運営する。	(27年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
菊池委員	A			
柏木委員	A			
樺澤委員	A			
河原委員	A	災害への備えとして防災訓練をされたことは有効だと思う。平時であっても動線に迷うことがあるので、万が一の際、職員の方の誘導は重要になる。		
木下委員	B	・ミュージアムショップの水準 ・経年劣化のためかワークショップ室の扉の開閉が困難な場所があり、長い間修理されていない。 ・ワークショップ室裏・本館壁面(ガラス面)の劣化・汚れ(10周年イベントで使用した際に初めて気付いた)		
草川委員	A	運営事業者であるレストランのメニュー内容・スタッフの対応・メニュー説明などすばらしいものである。ホテルとして見習うことが多い。		

⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える。		〔バリアフリー〕		
達成目標	・福祉関連事業への参加者数延べ400人以上	(27年度)	1次評価	2次評価
			B	B
小林委員長	B			
菊池委員	B	託児目標の設定と障害者ワークショップの検証が必要では。		
柏木委員	B	実施事業に鑑み、目標数値が適切であったか、検討すべきと考える。		
樺澤委員	B			
河原委員	B			
木下委員	B			
草川委員	B			
実施目標	・年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらう(環境づくり)のための各種事業を行う。 ・必要に応じて、対話鑑賞等の人的サポートを実践する。 ・託児サービスを積極的に周知していく。	(27年度)	1次評価	2次評価
			A	A
小林委員長	B	障害者を配慮しての福祉関連事業だとすると、一般参加者とは状況が異なる。そうした相違点を考慮し、予定延べ人数の減少の原因をと、実施目標に設定した項目との相関関係を見直しての分析が必要であり、そうした視点での検討を前提にした評価が望まれる。		
菊池委員	A	託児サービスのPRは必要だが、あくまでオプションであるため、目標値にそぐわない気がする。		
柏木委員	A	次年度への課題をどう解決するか検討が望まれる。		
樺澤委員	A			
河原委員	A			
木下委員	A			
草川委員	A			

⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する。 [経営的視点]

達成目標	電気使用量、水道使用量、事務用紙使用枚数を直近3年間の平均値を目安とする。		
	(27年度)	1次評価	2次評価
	A	B	
小林委員長	B		
菊池委員	A	なぜそうなったのかを分析することが大事。	
柏木委員	A	適切な原因分析がなされており、若干の増加は容認すべきと考える。	
樺澤委員	A		
河原委員	A	水道使用量・事務用紙使用量の増加は、運営上の必要量といえるのではないか。電気使用量の減少に運営管理の意識と努力が見られる。	
木下委員	B		
草川委員	B	目標数値をオーバーしてはいるが、観覧者数の増加などに比例する部分もあると思うので、A評価でも良いかとも考える。	
実施目標	・職員全てが費用対効果を常に意識し、事業に取り組む。		
	(27年度)	1次評価	2次評価
	A	A	
小林委員長	B		
菊池委員	A		
柏木委員	A	経費削減は厳しく求められるべきだが、必要な調査出張等が、圧縮されないよう留意していただきたい。	
樺澤委員	A		
河原委員	A		
木下委員	A		
草川委員	A	職員皆さんが意識している様子が見える。	